

10 十五年戦争と日本民族衛生学会

(協会)

蒞 昭 三

一、研究の目的と方法

国民の医療や医学界に「十五年戦争」はどのような歪みを与えたかを、これまで「日本医学会総会」、「日本外科学会総会」、「日本内科学会総会」との関連で検討してきた。

今回の研究は、それを「日本民族衛生学会(協会)」について検討し、学会の創設、学会の事業やその学術大会の演題等がどのように戦争政策に影響をうけていったかを明らかにすることを目的とした。

研究の方法は十五年戦争期に発行された「民族衛生」誌や「日本民族衛生協会学術大会」等の記録を中心に分析した。

二、考察と結論

① 日本民族衛生学会の発足の経緯

第一次世界大戦前後の十九世紀末から二〇世紀初頭は先進諸国の工業化と階級分化の進行に伴う人口の減少傾向、犯罪行為の増加等の社会問題と関連して「社会ダーウィン主義」が浸透し、各国の「優生運動」が醸成された。イギリスでは優生学実験所の設立、ドイツでは「民族衛生学会」の設立、遺伝生物学・民族衛生学研究所の設立、アメリカでは断種法の決定やカーネギー研究所の「優生記録局」の設立、そして国際優生学連盟の設立等がそれである。わが国でもこのような情勢の中で日本優生学協会設立草案が提起(一九二五年)された時期である。

このような情勢を背景に永井潜らを中心に日本民族衛生学会は一九三〇年一月に創設され、第一回学術大会は翌一九三一年に開催された(日本医学会の第一三分科会)。

その設立の主旨は「生命の根本を浄化し培養せんとするのが吾が民族衛生学会の使命」とし、「政治を浄化し、経済を浄化し、法律を浄化し、宗教を浄化し、……」とされた。

又その理事、評議員には医師・医学者は勿論であるが、法律家、陸軍政務次官、政治家―吉田茂、鳩山一郎等の幅広い人々が参画し、また設立総会には浜口首相の祝辞が予定されたり、「政治の浄化」が掲げられたりと他の学会の発足と比較して時の政治的機運を色濃く反映した発足であった。

② 日本民族衛生協会としての運動

このように設立された日本民族衛生学会は一九三五年に日本民族衛生協会と改称し、翌年の第五回学術大会で「日本民族衛生協会の建議」を発表している。それは日本民族衛生研究機関の設立、断種法の制定、結婚相談所の設置、民族衛生学（優生学）思想の普及徹底、各種社会政策の民族衛生的統制の五項目の推進の宣言である。その冒頭には「よきたねを 選び々々て教草 うゑひろめなむ 野にも山にも」と明治天皇の短歌を記載し、「日本民族としてのハッキリした自覚」をもって「日本民族の優越性を闡明して……その短所を摘発して之を剪除する……」と述べている。この建議後協会として積極的に優生思想に従った結婚相談所運動や「断種」を核とした「国

民優生法」の提案など積極的に当時の「富国強兵」政策に参画していった。

③ 戦争中の協会（学会）学術大会の概略

十五年戦争中の学術大会の概略は表（学会会場で当日配布予定）の如くである。結成当時の一般研究は発育や身体計測の研究などがみられたが次第に遺伝、優生関係の論文が多くなり、やがて戦争の終末近くでは民族力増強と母性問題や「大東亜共栄圏」内の民族の研究（混血問題など）報告も見られるようになったのが特徴である。

④ その他

尚、近年の「民族衛生」誌上や「学術サロン」で「民族衛生」という学会名について論議がされている。科学省の社会的責任という立場からはこのような論争は当然である。しかし「民族衛生」は暗いイメージについて、学会のより歴史的な経過をたどった論議が必要である。

（社団法人石川勤労者医療協会 城北病院）